

### III 般人の観念世界

本日は、まず樋口隆康先生より、殷周両文明の特色についての概説を承り、ついで、李学勤先生ならびに、裘錫圭先生から、とりわけこの殷周両文明を特色づけているところの、文字文化の特徵について、お話を承ったわけでありませう。

ところで、これまでの諸先生のお話のうちにもうかがわれますし、我々自身、しばしば、「殷周時代」とか「殷周文明」とかの語をもって呼ぶところからも知られるように、殷代と周代とを一連の——ひとつながりの——時代、文明と見なしがちなところがあります。

今、なぜこのような言い方が一般的なのかを振り返って考えてみますと、ひとつのことに思い当たります。それは、中国の歴史において大きな結節点と申しますか、フシメになった重要なひとつは、はじめて皇帝制度が成立し、統一帝国ができ上がり、国家制度の整った秦漢時代なのであります。そこから見て、「それ以前の時代」という意味で、これを「先秦時代」という名で呼びますが、さらにこの時代は「夏・殷・周三代」とも呼んだのであります。つまり、これは昔からの伝統的な呼び方だったわけでありませう。

ところで、今日、御存知のように、夏王朝というものがはたして存在したかどうか、中国の考古学界での最大の関心事のひとつになっているのであります。様々に論争が繰り返されております。今日は、この問題にこれ以上入るのは避けましますけれども、これは要するに伝説に言う夏王朝とは実在したのか、実在を証明するための証拠を示しうるか、といったことに関わるものであります。

て、いろいろの考え方はありますけれども、現段階では、確実な証拠というものは出てきていない、といわざるを得ないように思います。

次の「殷王朝」につきましては、皆様すでに充分御存知のように、實在どころか、その文化内容は、ある面では、非常によく分かってまいりました。そういつたわけで、先秦時代の別名である「夏殷周三代」のなかから、消去法で、實在性の不確実な夏代が取り除かれまして、「殷周時代」という言い方ができ上がってきたものと考えられます。つまり、こういう「時代」の呼び方がありますけれども、それは殷文化と周文化が、それぞれに解明され、その両者の文化的同一性ないし連続性といったものが強く認識された結果として呼ばれたのではなかったらう、ということなのであります。

さて、これから申しあげる私の話の結論に近い部分から先回りして申しますと、私は、殷文化と周文化というものは、基本的にと申しますか、または本質的にと申しますか、かなり相違したものであったと考えます。もとより、ひとつの王朝が他の異文化をもった民族によって滅ぼされ、次の王朝が打ちたてられる、といった場合、その文化内容には、連続した部分と、新たな、連続しない部分が出てくるのは当然のことでありまして、そういうことは、中国史上、所謂異民族いみゆゑるによる征服王朝が打ちたてられ、そのたびに、新たな、中国文化が形成された場合において、殊に顕著であ

ります。

殷王朝は、六、七百年間もの長期間、永続し、中原に支配者として君臨し、定住農耕民としての文化を築き上げました。この、六、七百年というのは中国有史約四千年のうち最も永続した王朝ということになります。これに対しおそらく、殷末に近い古公亶父ここうたんぽのとき、ようやく遊牧生活を脱し、定住化してからさほど長期間を経てはいなかったと考えられる周人との間には、殷周革命時において、文化面でのたいへん大きな落差があったのは当然でありましょう。

一般的に言って、農耕民は、その農業生産が、自然条件によつて決定的に左右されるところから、遊牧民よりも——これはあくまで比較的に、であります——より呪術的になり、また、その結果、生活態度も、より因習的、より保守的になる、と考えられます。かつ、農耕民は必然的に定住生活が基本になりますから、武力的には防衛的になり、機動性をもつた遊牧民が攻撃的であった、ということも当然のことであります。

一方で、農耕による生産性の向上や、定住という好条件が、その物質文明での進展、たとえば、陶器や青銅器を作る技術が進展するといった面や、恒久的な建造物が作られ、大型化するといった発展の要因ともなります。さらにそういったことは、社会・制度面での変化をも呼び起こし、人口増大や生産関係ひいては社会構造、さらには国家統治機構の精緻化といった面で、農耕社会は、特色づけられていくことになります。

さて、本日私がお話し申しあげたいのは、殷文化というものの基本の一端を、周文化との比較において考えるかどうか、特に殷人の精神世界、觀念世界というものは、周人のそれと著しく異なったもののように思われるけれども、その点をもう少し具体的に解明できないだろうか、といったところにあります。

と申しますのは、すでに樋口先生のお話やスライドでの御説明の中にもありましたが、殷墟発掘結果によって分かってきました殷文化、またその後、引き続き各地から発見される殷文化というものの実相が明らかにされるにつれ、彼らのもっていた文化というものは、かなり異様な、少なくとも今日のわれわれのもっている文化とはひどく懸け離れたものだったらしい、そしてそれは、その後、中国の周文化と較べてみても、かなり異なったもののように思われる、そしてまたそれは、中国のみならず、世界的に見ても極めて異様な文化であったように思われる、といったことに由来いたします。

例えば、殷文化解明のための最大の手がかりになった甲骨文そのものが、動物の骨やカメの甲羅を熱してヒビワレを生じさせ、その割れ方によって彼らが至上神であると考えた「帝」の意志を察知して、それをもって、自らの行動を決しようとした、殷人の精神構造の産物だったわけでありますが、これは、いわば国家行為として行われているのでありまして、このことは、彼らの「政治」

が、く、く、く、形式的には、こ、こ、こ、骨トという我々からすれば偶然事によつて支配されるべきだ、という觀念に支えられていた、ということの意味しているわけでありませう。

また、同様に殷墟発掘の青銅器を見れば、これらは彼らが祖先神を祭るために行つた祭祀に用いた器でありましたが、人を威嚇するような怪異な紋様が、その器体全面を覆つております。

さらにまた、樋口先生のスライドにありましたように、殷墟からは多数の墓が発見されておりますが、巨大な、王墓と推定されるものうちには、その建造の際、数百人の犠牲（いけにえ）を伴つている場合がありますし、また、宮殿・宗廟址からも、きまつて少なからざる犠牲者が埋められているのが発見されるのであります。

これらに共通しているのは、彼らが創造した「モノ」のすべてに、必ずまつわりついている、われわれの理解の届きそうにない、いわばおどろおどろしくもまたまがましい「觀念」であります。そして、彼らの文字文化、というものもまた、そういった「觀念」の中から、創造されたものであつたに相違ないのであります。

技術的には極めて高度に発達した物質文明ではあるが、それを造りだす支えになつた「觀念」は、我々のそれとは著しく異なつたものだったのであり、逆にその特異な「觀念」こそが、こういった文明を生みだす原動力になつていたように思われる。そういった考え方が正しいなら、われわれは、単に発見される「モノ」に驚嘆しているだけではなく、彼らが何を考えたが故に、かかる怪

異な文明を築きあげたのか、また文字文化をつくりあげたのか、その精神構造にまで踏み込んでみなくては、殷文化というものの実相に接近したとは言えないのであるまいか。今、こういったことを頭に置いて、ひとつの仮説を通して、殷人たちの観念世界がどのようなものだったかについて、想像を巡らせてみたいと思うのであります。

中国は、神話の乏しい国だといわれます。しかし、このことは、中国古代の人々が神話的精神世界をもつていなかった、ということの意味するものではない、と思います。『尚書』や『詩経』をはじめ、多くの古典中に、断片的にはあるけれども神話的なものが残っていることは、多くの研究者の認めるところです。ただ、それが、たとえば、ギリシャ・ローマや日本の場合のように、集大成され、体系化される、ということがなかった。それが何故かはそれなりに興味ある問題であります。別の機会に譲りたいと思います。

いま、こういつたいくつもの古典中に、少しずつ内容に相違するところをもつ、断片的に残されている、ひとつの神話に、注目してみたいと思います。これは、『莊子』『淮南子』『楚辞』などにも見えておりますが、もつとも纏まとまった形では、『山海經せんがいきょう』に見られます。この書物は、戦国時代から秦漢時代にかけて成立した、といわれておりますが、たいへん古い話を残しているものとして注目され、たとえば甲骨文研究の初期の段階でたいへん功績のあつた王国維氏は、甲骨文の内容